

# お札と切手の 博物館 ニュース

Banknote and Postage Stamp  
Museum News

## Contents

特集 国立印刷局王子工場150年記念  
草創期の製紙事業と越前の職人たち

シリーズ 世界のお札と切手をたずねて⑧  
松田緑山の門人たち ―その1 吾妻健三郎

2025/12/1  
Vol. **57**



(行設會電報)

Mitsunata preparation room.

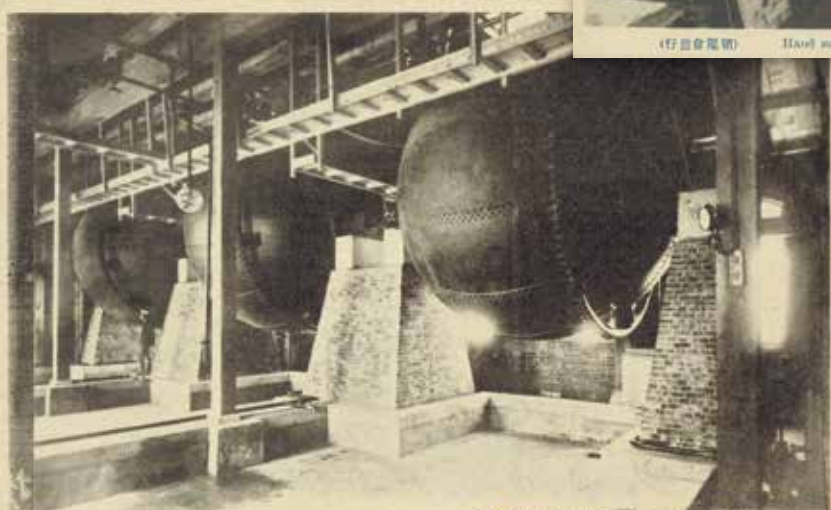
室調精料紙漉手部紙抄



(行設會電報)

Hara's making room, paper mill.

室漉手部紙抄



(行設會電報)

Bag loader room, paper mill.

室釜蒸料紙漉機漉紙抄



# 国立印刷局王子工場 150 年記念 草創期の製紙事業と越前の職人たち

お札と切手の博物館は、国立印刷局が王子に構える証券印刷工場（王子工場、図1）の敷地内にあります。

王子工場は、印刷局の工場の中で最も古く、令和8年2月に操業150年を迎えます。この機会に、現在とは異なる製紙事業を展開していた工場の草創期のエピソードについて、博物館が収蔵する関連資料とともに振り返りたいと思います。

## 工場設立の趣旨

現在、王子工場は、切手や諸証券類を印刷する工場ですが、当初は、近代的なお札用紙を作るために設立された製紙工場でした（図2）。

設立の契機となったのは、明治初期のお札事情です。当時流通していたお札に偽造が相次いだため、印刷技術の進んだ欧米にお札の製造を委託したところ、用紙に耐久性がなく、コスト高等の様々な問題があり、お札の国産化が急務となりました。

そこで、近代的な印刷技術の導入とともに重要視されたのが、「用紙」でした。明治8（1875）年、印刷局に製紙部門「抄紙局」が設置され、その工場として建設されたのが王子工場です。その使命は、精巧で偽造抵抗性が高く、耐久性のあるお札用紙、即ち、日本固有の材料と古来の製法による精密なすかし入りの用紙の研究開発でした。当時は、民間の製紙会社が洋式の機械で一般紙を製造していましたが、印刷局ではあえて手すきで、和紙の技法を礎に、これに合う原料（みつまた）を選定し製造することで、国内外からの偽造に対抗できるお札用紙を編み出そうとしたのです。

製紙事業をはじめ、お札の国産化を主導した印刷局長・とくのうりようすけ得能良介（図3）は、「偽造防止の秘術を尽くし、国内外の誰にも真似のできない優れた用紙を発明することで偽造を断念させ、国民の利益を守る。さらには日本の製紙技術を拡充し、国益増加を図る。」と意気込みを述べています。

工場建設の地として王子を選んだ理由としては、千川用水の上質で豊富な水や、石神井川から隅田川に通じる水運の便など、製紙のための好条件が揃っていたことと、既に当地で工場を操業していた抄紙会社（現在の王子ホールディングス（株））の製紙機械設備が充実していたことが挙げられます。同社の創設者・渋沢栄一は印刷局の初代長官であり、また印刷局が所管庁として同社の設立認可を行ったこと等もあって関係は深かったといえます。



図1 現在の王子工場正門



図2 明治12年ころの王子工場正門

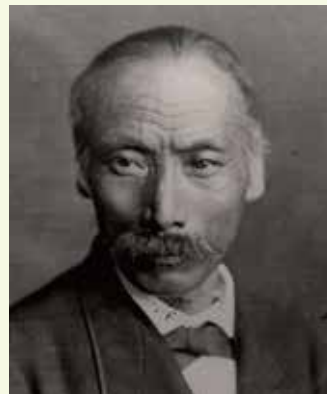


図3  
製紙事業に注力した得能良介



## 工場の実務

明治10(1877)年当時の印刷局の職制を記す『紙幣局工場職制』の製紙部門(抄紙部、抄紙局から改名)の項には、以下のように明記されています。

「抄紙にあたっては、優れた品質はもちろんのこと、当該部門の使命は、原料薬品の配合に際し各種の秘密を設け、偽造防止の秘術を施すことである。常にこの点に留意し尽力すべし。」

部内は、検査、配合、抄手、整理の4科に分けられ、機密事項については各科内の共有に限るなど、厳しく管理されました。

時代は下りますが、大正10(1921)年に、印刷局の創立50周年を記念して発行された「印刷局作業絵葉書」から、実際の作業内容を確認することができます(図4、表紙写真)。

## 特殊なお札用紙と越前出身の職人たちの貢献

そもそもお札用紙の製造にあたっては、製紙技術に長けた専門家からの伝習が不可欠です。明治8年、江戸から明治初期まで、様々なお札用紙の製造実績がある越前いまだての今立郡五箇ごか(現在の福井県越前市今立町)から、当地で活躍していた紙すき職人数名を採用しました。ここから、印刷局は越前和紙の伝統技法を礎に技術開発を進めてゆくこととなります。

お札用紙には、一般紙とは異なる特殊な性質が求められます。第一に重要なのは、偽造防止のため、緻密に設計された印刷デザインを機械印刷で鮮明に再現できる品質(印刷適正)です。第二に、流通上の折れやこすれ、破れに強い耐久性です。そこで、洋紙の印刷適正と和紙の耐久性とを兼ね備えた用紙で、さらに偽造防止効果を高めるすかしの入った印刷局独自の用紙を開発することとなりました。

すかしは、紙をすく段階で紙の厚さを調整し、図柄を表す高度な製紙技術で、現在も重要な偽造防止技術の一つです。すかしには、光にかざすと白くすけて見える「白すかし」(紙の密度が薄い)と、その逆の「黒すかし」(紙の密度が濃い)の2種類があり、これらを組み合わせた精巧な白黒すかしが現在のお札に採用されています(図5)。なお、黒すかしや、お札等の政府が発行する証券類に類似した白すかしは、明治20年以降現在も、実際には印刷局以外での製造が禁止されており、門外不出の技術となっています。

図4 「印刷局作業絵葉書」 大正10(1921)年



配合科  
抄紙の技法、原料薬品等の研究開発



抄手科  
お札、諸証券類の用紙の抄製(手すき)



検査科  
白紙を検査のうえ厳に封緘する



図5  
(左) 現在のお札の白黒すかし  
(右) 肖像の背景の高精細すき入れ  
日本銀行券 F1万円 (部分透過画像)  
令和6(2024)年

これらの技術開発に尽力したのが、最初期に採用した職人たちです。  
越前の由緒ある紙すきの名家出身の加藤河内<sup>かわち かもん</sup>(賀門)や、山田藤左衛門<sup>とうざえもん</sup>は、画期的な技法の研究改良をした功績で記録に名を残しています。  
また、現在、重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されている九代 岩野市兵衛<sup>いわのいちべい</sup>氏の祖父(七代 岩野市兵衛)とその兄弟4名のほか親族が、その腕を奮ってお札用紙の開発に貢献したということです。

その結果、明治10(1877)年には最初のお札用紙(すかしなし)が完成(図6)、同15年には簡単な白すかし(図7)が、同22年には精巧な白黒すかしが実用化されました(図8)。これが、今のお札用紙の基礎となっています。さらに、この特性を生かした多目的用の「局紙」も開発し、主に輸出用として海外で高い評価を受けました。

当館では、職人たちの遺族から寄贈を受け、技術開発の歴史を物語る資料を収蔵しています。

加藤河内は、その貢献度の高さから正式に印刷局に採用され、その後判任官(技手)まで昇進しました。採用当時の局長・得能良介<sup>とくのう りょうけい</sup>の恩義に報いるため、当代の画家・二世五姓田芳柳<sup>ごせだほうりゅう</sup>に肖像画の制作を依頼したといえます(図9)。河内は、郷土の伝統製法を他に明かしたとして、生涯郷里に戻れなかったとも言われています。

また、山田藤左衛門は、お札に欠かすことのできない黒すかしの開発に成功した人物で、これに関連し、明治20年代に作成したとみられる鮮明な黒すかしの作品が残っています(図10)。

さらに、岩野家の兄弟のうち、三男の岩野卯平<sup>うへい</sup>が奉職のため明治13年に越前の村代表に届け出た寄留届があります(図11)。そこには、その父で四代 岩野市兵衛の名も見えます。



図6 印刷局が最初に実用化したお札用紙(すかしなし)  
国立銀行紙幣(新券) 1円 明治10(1877)年



図7 白すかし(トンボと桜)入りのお札  
改造紙幣 5円 明治15(1882)年



図8 精巧な白黒すかし入りのお札  
日本銀行兌換銀券 改造1円  
明治22(1889)年



図9 加藤河内が制作を依頼した  
得能良介の肖像画  
二世五姓田芳柳筆「得能良介」  
制作年不明

図10  
印刷局が京都で撮影した仁和寺の写真(左)をモチーフに  
山田が作製したすき入れ紙 明治20(1887)年頃



図11 四代 岩野市兵衛と三男岩野卯平の名が記された文書  
岩野卯平寄留御届 明治13(1880)年  
王子工場で働くため3年間王子に居住する旨を届け出た申請書。

こうした資料からは、職人たちが自身の家業に優先して国の一大事業に参画し、試行錯誤の末に至高の技を編み出したことが見て取れます。印刷局で製紙技術の開発と伝習に大きく貢献した職人たちの存在と、現在のお札用紙までつながる越前と印刷局との関係を表す重要な資料です。

今回は、王子工場の草創期にまつわる資料を紹介しましたが、昭和期に証券印刷工場へと業態を変えた工場のエピソードについても、機会を見つけて紹介したいと思います。

(学芸員 土井 侑理子)



# 世界のお札と切手をたずねて⑧

## ●スリランカ 紅茶と世界遺産の「光輝く島」

スリランカは、建国の起源(伝承)が紀元前5世紀にまで遡る島国です。19世紀以降にイギリス領の植民地となり、「セイロン」と呼ばれていましたが、1948年の独立後、1978年から現在の国名「スリランカ(シンハラ語で「光輝く島」の意)」へと変更されました。

1870年代半ばには、プランテーション農業により世界有数のコーヒー産地となったセイロンでしたが、その後の病害でコーヒーが壊滅状態となったため、代わりに栽培されたのが紅茶でした。紅茶は、現在もスリランカの主要産業、主要貿易品であり、国名が変わっても高品質な「セイロンティー」の名で、政府がその品質を保証しています。茶摘みの風景は古くから切手やお札のデザインに取り上げられており、紅茶産業の周年を記念する切手も発行されています(図1~4)。

また、スリランカには6か所の世界遺産があり、特に有名なのが、国土の中央付近にある「文化三角地帯」と呼ばれる地域です。1980年には、「ユネスコ・スリランカ文化三角地帯プロジェクト」が立ち上がり、遺跡の保全活動が行われました。これが世界遺産登録に結び付き、当地は、「聖地アヌラダプラ」、「古代都市ポロンナルワ」、「古代都市シギリヤ」、「聖地キャンディ」、「ダンブッラの黄金寺院」という5つの世界遺産が一堂に会した観光地となっています。こうした遺跡の保存活動は、記念切手の題材として取り上げられたほか(図5)、国の代表的な景観としてお札にも取り上げられています。(学芸員 土井 侑理子)



図1 古くから切手に描かれてきた茶摘みの風景  
左:20セント 1938年  
右:85セント 1954年



図3 セイロンティー150年 35ルピー 2017年  
1867年、セイロンで初めて紅茶栽培を行った「紅茶の父」  
ジェームズ・テイラーと紅茶産業が描かれている。



図2 セイロンティー100年  
4セント、40セント、50セント、1ルピー 1967年  
紅茶の調査、試飲、茶摘み、輸出までの工程が描かれている。



図4  
茶摘みと世界遺産を描くお札  
100ルピー(裏) 1995年  
茶摘みする女性の背後には、世界遺産「古代都市シギリヤ」の切り立った岩山「シギリヤロック」が描かれている。



図5 ユネスコ・スリランカ文化三角地帯プロジェクトを記念する切手  
35セント・1.6ルピー 1980年  
上段左から アヌラダプラのジェータワナ・ラーマヤ仏塔、  
キャンディの仏歯寺、アヌラダプラのアバヤギリ大塔、  
下段左から ダンブッラの石窟寺院、シギリヤロック、ポロンナルワの仏塔

## 松田緑山の門人たち

—その1—  
あづまけんざぶろう  
吾妻健三郎

松田緑山(図1)は、明治4(1871)年に設立された国立印刷局の前身である大蔵省紙幣司(のち紙幣寮に改称)の黎明期において、製品製造に大きく貢献した御用銅版画師です。

当時、紙幣司では製品を印刷する際に必要な、手彫りによる銅板原版の製作を民間の銅版画師に委ねていました。緑山は初めてその任を負い、日本初の全国共通紙幣である「太政官札」続いて「民部省札」、さらに国産切手第一号である「龍文切手」などの銅板原版を作製しました。

また緑山は、銅版印刷から石版印刷へと、後々印刷の主流が交代することを早くから予見していた人物でもありました。石版印刷技術の研究を重ね、紙幣寮から「お役御免」となった後は、銅版・石版印刷所「玄々堂」を興してこの技術を後進に指導し、多くの優秀な人材を育てました。

シリーズ「松田緑山の門人たち」では、松田緑山に師事した人びとを取り上げ、ご紹介します。

## ■松田緑山のプロフィール■

京都の銅版画舗「玄々堂」を営む初代玄々堂<sup>まつもとやすおき</sup>・松本保居の長子として生まれた松田緑山は、幼名を亀之助、長じて敦朝<sup>あつとも</sup>、儀一郎<sup>ぎいちろう</sup>を名乗りました。緑山は号で、ほかに蘭香亭<sup>らんこうてい</sup>や清泉堂<sup>せいせんどう</sup>などが確認されています。

幼いころから彫刻の才能を発揮していたとされる緑山は、「微塵銅版」<sup>びじんどうはん</sup>と呼ばれる細密精緻を旨とした技術に優れ、幕末の頃には水戸藩や高知藩(図2)、摂津高槻藩の藩札原版を作製していました。卓越した彫刻技術と経歴が認められ、「民部省札」製造の命を受けた緑山は、明治2(1869)年2月に上京、東京呉服橋の三井組の作業場にて銅版彫刻に従事することになりました。

その後明治4(1871)年には、龍文切手(図3)4種、翌年龍銭切手4種(図4)、各種紙幣、証券類の製造に携わりました。手彫りによる銅版の製作から始まり、エドアルド・キヨッソーネにより、西洋方式の彫刻、製版、印刷技術がもたらされ、安定した品質と生産が可能となるまで、日本における公共印刷製品製造の過渡期を支えた功労者でありました。



図3 龍文切手 48文  
明治4(1871)年



図4 龍銭切手 1銭  
明治5(1872)年



図1 松田敦朝(緑山)  
天保8(1837)年2月4日～  
明治36(1903)年10月31日  
郵政博物館所蔵



図2 高知藩札 銀1貫目(表面)  
慶応3(1867)年





図5 吾妻健三郎  
安政3(1856)年2月9日～  
大正元年(1912)年10月26日  
『日本古書通信』平成3(1991)年6月号  
より転載

## ■松田緑山の門人

### —『風俗画報』を創刊した吾妻健三郎— ■

緑山の門下生の一人、吾妻健三郎(図5)は、雑誌『風俗画報』(図6)を出版した印刷界の重鎮です。

現在の山形県米沢市で、代々藩主上杉家に仕える藩医の家系に生まれた吾妻健三郎は、明治5(1872)年に上京、南校製作学教場を経て印刷会社「東陽堂」を開業します。

製作学教場では、ドイツ人教師ゴットフリート・ワグネル(Gottfried Wagener)に師事し、銅版印刷の技術を学びました。明治9(1876)年に刊行した銅版印刷による『<sup>しょうちゅうさう がく しよ</sup>掌中数学書』が評判を呼び「東陽堂」を創業、レットル(ラベル)の開発や正確・迅速な地図の作製など、その業績は時代の先端を行くものでした。

中でも、明治22(1889)年2月10日に創刊した雑誌『風俗画報』は、吾妻が遺した最大の功績であると考えられます。同誌は、日本初のグラフィック雑誌であり、明治時代の人々の姿や街の様子などを、挿絵と文の双方から生き生きと描出したところに特徴があります。

主な記事に附された石版画(日露戦争以降は写真版)の口絵は、吾妻が創出した「万筋」と呼ばれる石版印刷技術で印刷され、日本画特有の筆さばきの繊細さを鮮やかに再現するもので、これにより吾妻は「石版印刷の先覚者」と呼ばれるようになりました。吾妻が営んだ「東陽堂」は、このように銅版印刷から始まり、石版印刷を主とする印刷会社へと体制を変えて行きました。吾妻が師事した松田緑山は、銅版彫刻師で石版にも精通した人物であり、会社を創業したことは先述の通りですが、「東陽堂」における会社体制を変化させ、石版印刷が主流となる時代に即した事業を展開したところに、緑山からの影響をかいま見ることができます。

松田緑山の門下生であった吾妻健三郎は、印刷業界における実力者として永きにわたり斯界を牽引した中心的な人物でした。大正元(1912)年10月26日に、56年の生涯を閉じました。

(学芸員 林 直子)



図6『風俗画報』創刊号  
明治22(1889)年2月10日刊行

## 参考文献

- 大蔵省印刷局記念館編 図録『お札と切手の博物館』……………平成9(1997)年  
神奈川県立近代美術館 図録『幕末維新の銅版画玄々堂とその一派展絵に見るミクロの社会学』…平成10(1998)年  
天理大学附属天理参考館編 図録『幕末明治の銅版画—玄々堂と春燈斎を中心に—』……………平成18(2006)年

COMING SOON

展覧会予告

令和7年度特別展

## 紙幣寮の銅版画師

明治時代を<sup>きざ</sup>鑄んだ  
職人の技

2026年1月14日(水) ▶ 3月8日(日)



国立印刷局の前身である紙幣寮では、製品を印刷・製造する際、手彫りの原版製作を民間の銅版画師に委ね、松田<sup>ろくざん</sup>緑山、梅村<sup>すいざん</sup>翠山、柳田<sup>りゅうせつ</sup>龍雪、中村<sup>げつれい</sup>月嶺等が活躍しました。エドアルド・キヨッソーネの登場によって彼らは「お役御免」となりましたが、残された製品は、草創期の紙幣寮の姿を今に伝える貴重な資料となっています。

本展では、このような銅版画師たちの活動を通して、紙幣寮の歴史や製品製作の実態をご紹介します。特に、具体的な御用銅版画師の活躍をよりいっそうご理解いただけるよう、中村月嶺が紙幣寮から受注した製品内容の記録帳「紙幣寮 御下絵<sup>しへいりょう おんした え</sup> じょうのうおほえ ごようひかえ 上納覚 御用控」とその翻刻文を展示します。この機会にぜひご覧ください。

また、会期中には、凹版印刷体験イベントも開催しますので、ふるってご参加ください。

## イベント(無料) 凹版印刷体験

お札に使われる印刷方式「凹版印刷」を体験できます。

完成した印刷物は、記念にお持ち帰りいただけます。

**所要時間** 約30分(体験時間約20分+乾燥時間約10分)

**開催日時** 以下の各日10:00~11:50(受付開始9:50~) 13:10~16:00(受付開始13:00~)  
2026年1月30日(金)、31日(土)

2月1日(日)、6日(金)、7日(土)、11日(祝)、13日(金)~15日(日)

20日(金)~23日(祝)、27日(金)、28日(土)

3月1日(日)、6日(金)~8日(日)

※体験には約30分程度の時間を要するため、早めに受付を終了する場合があります。

※体験の対象者は小学生以上とさせていただきます。



## ご利用案内

入館  
無料

開館時間: 9:30-17:00

休館日: 月曜日(祝日の場合は翌平日)  
年末年始、臨時休館日

交通

JR京浜東北線「王子駅」(中央口)下車 徒歩3分  
東京メトロ南北線「王子駅」(1番出口)下車 徒歩3分  
都電荒川線(東京さくらトラム)「王子駅前」下車 徒歩3分  
※駐車場はありません。

常設展

新日本銀行の紹介  
偽造防止技術の歴史—印刷・製紙技術  
重要文化財 スタンホープ印刷機  
お札の移り変わり/世界のお札  
切手の移り変わり/世界の切手  
※特別展開催時は一部展示の変更があります。

独立行政法人 国立印刷局  
お札と切手の博物館

〒114-0002 東京都北区王子1-6-1

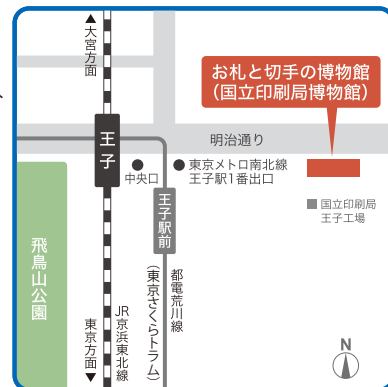
TEL.03-5390-5194

https://www.npb.go.jp/museum



お札と切手の博物館

検索



発行: お札と切手の博物館(国立印刷局博物館)

発行日: 令和7年12月1日 ©2025

本書掲載の内容を許可なく複写、複製、転載することを禁じます。

※この冊子は再生紙を使用しています。